

労働者魂發揮し、「二つの地獄」ぶち破れ 仲間への信頼、組合の団結こそ勝利のカギ

12月15日定期委員会での中野委員長の提起(要旨)

十二月十九日の「設立委員会」が「新会社」「清算事業団」の雇用、労働条件について提案した内容を一瞥みて「去るも地獄、残るも地獄」ということだ。国鉄労働者が低賃金の中で先輩たちが永い間かけて蓄積してきたあらゆる労働条件、あらゆる権利が全部たたきつぶされ、それに逆う者は排除する論理に貫かれており、われわれが指摘してきたとおりのもではないか。

決算」を叫び、戦後、労働者人民が培ってきた権利その他諸々を奪いとり一掃する、その中心軸に国鉄労働運動解体が据えられている。このことをさしたる抵抗もなく許してしまうならば、いったいこれからの日本はどうなるのか。

労働者・人民への総攻撃 が開始された

円高不況といふ労働者への総攻撃が開始され、八七年以降もっともっと暗い時代になる。世界に冠たる低賃金、長時間労働の日本の労働者でもそれなりに獲得してきた権利はある。年金・退職金問題を含めた一切合切がこの攻撃の中に吹っこんでしまう状況に立ちいたる。そのためにも国鉄の労働組合をつぶさなければならぬのである。だからこそ、われわれは、いま闘わなければならない。

12月11月、組織の存亡かけ 決戦中の決戦にかちぬこう！

いま、当局が期限をきって希望調査を行ってきたのか。スケジュール的なこともあるが、やろうとしていることは、組合を脱退しなければ「新会社」にいけないうぞ、と最終の脅しをかけているのだ。では、「新会社」「清算事業団」がどうなっていくのか、このすべてを明らかにしていかななくてはならない。いまに、当局と一体となって分割・民営化推進している「改革協」とりわけ動労内部に大きな矛盾が起る。そして、いまだかつて



「去るも地獄、残るも地獄」が、いつの間にか「天国」にすりかえ

中曽根は「国鉄改革は明治維新以来の大改革だ。やりとげるためには去るも地獄、残るも地獄にしなければ絶対できない」といつてきた。それがいつの間にか国鉄の中において残るのは地獄ではなくて天国だということを当局ではなく組合幹部が先頭になって吹聴し、何んとなく「新会社に行けることが天国」との風潮が蔓延し、そこで皆んな浮き足だち、仲間を裏切り、組合を脱落していった。

「分割・民営」は再建ではなく、労働組合解体の攻撃だ！

問題は、敵の狙いが「去るも地獄、残るも地獄」であり、二つの「地獄」に立ち向うのが労働組合であり、片方の地獄が良く、片方が悪いなどありえない。分割・民営化攻撃の狙いがベテンの虚妄宣伝の中で、その真実、事実が白日のもとにさらけだされつつある。

もう一つの狙いは、国鉄の労働組合を解体つくすことにある。「戦後政治の総

当局は国鉄の要員状況がどうなっているのかを説明していない。国労や動労千葉から何人減ったなどと定期的に発表するにもかかわらず、いつまでも不安にかりたて、あおり、一方で自殺者がでてくる。この現実に対し、いったい何が狙いなのかということを知らなければならない。

「新会社」「清算事業団」の 恐るべき実体をあばけ

雇用、労働条件について発表した。「新会社」は団交として提案したのではなく資料を渡しただけだ。これについて要求すら受けつけようとしていない。一旦解雇するんだから労組と団交の必要はない、新会社が勝手に決める、気に入らなければ来なくてよい、ということだ。だからこそ「新会社」における恐るべき実態を大衆的に明らかにしなければならない。

「清算事業団」は賃金問題のみ一応明らかにされているが勤務など全く明らかにされていない。明らかにできないのだ。役員・活動家先頭に、一糸乱れぬ団結で勝ちすすもう

分割・民営化攻撃は、国鉄労働運動解体にある。労働組合に結集している労働者一人ひとりの人間としての、労働者としての誇りまでも打ち砕く攻撃である。だからこそ動労千葉の現場の役員・活動家は満身創痍になりながら動労千葉の団結を動労千葉の組合員を守ってきたのだ。組織破壊攻撃を絶対許さず、団結を堅持し闘いぬけば必ず勝てるのだ。（要旨）

★「希望調査」に乗じた差別・差別、恫喝誘導、組織破壊攻撃を許さないぞ！
★悪質職制と裏切り分子の介入、不当労働行為を全員で監視し追及しよう！